

自分史のこと

後 藤 知 久

(会員・佐伯市中山区)

最近、「自分史」を書くという人が増えているようである。中には書くだけでなく、その書いたものを知人や友人に贈っている人もあると聞いている。国に歴史があるように、人にもそれぞれの歴史があることだし、考えてみれば、国の歴史というものは、人それぞれの歴史が積み重ねられて出来上がっているようなものだから、結構なことだといふべきことかもしれない。

正直の処、私も十分な自分の時間を持っているので、「自分史」を書いてみたいという気持は持っているが、いざとなると、(果たして「自分史」というものを、その本人が書けるものだろうか)という疑問がわいてきてつい、筆を取るのをちゅうちょしてしまう。もちろん、自分のことを自分で書くのだから一番確かなものだろうが、それでいて(果たして)という気持が消えないので

ある。

というのは、自分のことを書くとなると、客観的に冷静に自分の過去を表現できるだろうかと思うのである。

「自分史」である以上、本当のことを書かねば意義がないが、人間というものは、ともすると、悪い面は取り除くか、あるいは美化したりする習性を持っているようにそんな気持が少しでも入ったら、もう、その価値が半減されるのではないかという気がしてならない。

朝日新聞の朝刊に「談話室」というコーナーがある。そのときどきの話題を読者に論じ合って貰うコーナーでいま「戦争」をテーマにしている。

その中に「自慢話にはあきあきした」という意見があった。これに対し、ある人から「自慢話をしているのではない。戦争を知らない人達に戦争の苛酷さを知って貰

「いたいと思つて」と反論。また、ある人は「いつも戦争の被害者としての立場からの意見のようだが、被害者という立場だけでなく、加害者の立場でもあつたはず。なぜ、加害者の立場としての意見は出ないのか」という意見もあつた。

私が一番ちゅうちよするのはこのことで、自分で「自分史」を書く場合、この加害者の立場に立てるかという心配があるからである。

いま一つは、私の場合、小学校へ上がるまでの記憶が全然ないのである。このことについては、父や母が元氣なうちに聞いて置こうと思ひながら、とうとうそれを果たすことなく、父も母も亡くなつてしまつた。小学校に上がるまでといえば、ほんの短い期間ではあるが、やはり、これも六十有余年の人生の中の時間であることに間違いないのだから、おろそかにはできない。まして、私にとつては、以後、百八十度転換の人生が待つていただけに、この期間はなおさら大事だと思つている。が、心のどこかで、（できれば自分史を書いて置きたい）という気持は、今でも十分に持つてゐる。

私は大正十年十二月十八日、熊本県阿蘇郡小国町宮原

に生まれた。この年、内にあつては総理大臣の原敬が暗殺され、外にあつてはアメリカのワシントンで世界の軍縮会議が開かれてゐる。第一次世界大戦が終り、やがて来る世界的な不況の波の押し寄せる前夜ともいふべき時代で、現在となんとなく共通するものがあつた時代だつた。

私は熊本県生まれだが、父も母も純然たる大分県人である。その父と母がなぜ熊本県に来たのか、そのことも聞いておこう、聞いておこうと思ひながらも、これも聞きそびれてしまつた。

家業は繭の仲買人。この地域で買い上げた繭を愛知県豊橋市の製糸工場へ送つていた。そのほか、繭のシーズン・オフには、提灯（ちようちん）はりや、五月の男の節句ののほりを書いたりしてゐた。提灯（ちようちん）の注文先は、主に熊本市内の神社仏閣であつた。父は大變氣の短い人だつたのに、あんな複雑な家紋を提灯（ちようちん）に書くような面もあつた。

そんなことで、わが家は裕福とまではいかないまでも將來は、熊本市内の中学校（旧制）へ上がり、終えたら高校（旧制）・大学というのが、私の夢でもあり、両親

の夢でもあった。このままいけばその夢も果たされ、あるいは別の私が誕生していたかもしれないが、世の中はそううまくいかないのが普通のようなのである。

昭和五年六月、私にとって最大の転換期が来た。第一次大戦後の不況が世界的な広がりをもたせ、中でも生糸の相場の下落は激しく、そのあおりを食ってわが家は倒産逃げるように故郷の大分へ引揚げ、昨日までのバラ色の夢は破れ、これ以上の貧乏はないという貧乏につきあうようになった。

昭和十一年四月、私は小学校高等科二年を卒業し、大分市の銀行に勤めることになった。小学校の先生方はせめて師範学校でもとすすめてくれたが、父は「上の学校へ行ったかったら働きなから学べ」と言って、援助の手を差しのべて下さった方の好意もお断わりした。私は働きのながら学ぶことにし、夜間中学校へ入学した。

昭和十四年四月、中学校を卒業すると同時に上京した。母の従兄弟（いとこ）にあたる人が、東京で読売新聞の販売店を経営していたので、そこで新聞配達をしながら大学へ行こうと考えたのである。

しかし、これは今思えば失敗だった。その第一は、上

京の時期が悪かったことである。四月といえば、もう新学期が始まっている。入学するには一年待たねばならない。第二は、読売新聞は他の新聞と違って、昼と夜二回にわたって夕刊が出るので、一日三回の配達になる。それに仕事は配達だけでなく、その間をぬって読者の拡張という仕事がある。

当時、東京では「朝日」「日々」「読売」の三大新聞がしのぎを削りついで競争が激しく、ときには、配達人同志のけんかにもまで発展することがあった。新聞配達といえば、朝夕二回の新聞を配達さえすればよいと思っていた認識不足に泣くことになった。

そのうち、中国大陸での戦果は益々拡大し、国家総動員法・国民徴用令が施行され、若い者が新聞配達などしている、真っ先に徴用されると言われ、心ならずも周囲の者にすすめられ、現在の芝浦工大の前身である高等工学校へ入学した。

もとより畑違いの学校。それに第二次大戦と戦局は広がるばかりで、これ以上勉学は無理と判断し、世話してくれる人がいて、軍需工場の製鉄の原材料を買い付ける購買部で働くことになった。

昭和十八年八月、召集令状を受け取り佐世保海兵団へ入団。二か月間の訓練を終え、十月半ば、シンガポール、バタビア・スラバヤを経て、任地のセレベス島マカッサルに到着。ここでまた二か月間の現地訓練を終えてマカッサルの特別根拠地隊司令部の庶務で勤務することになる。

一年後、すすめられるままに受けた海軍経理学校の下士官候補生の試験に合格し、再び同じコースをたどって佐世保へ帰り、その後しばらく広島県の大竹海兵団で世話になり、昭和二十年三月、東京の海軍経理学校へ入学した。

どういうめぐり合わせか、昭和十七年四月の、初のアメリカ空軍の東京空襲を体験した私は、再び、あの三月と五月の二回にわたる東京空襲を体験した。

同年六月、無事経理学校を卒業すると、(同じ死ぬなから九州で)と、仲間の大部分は海軍省に残ったが、私は願って、佐世保へ帰してもらった。

昭和二十年八月十五日、相浦海兵団で終戦を迎える。

戦後はそれまでの疲れが出たのか病気との闘いが続きこれまで五回も手術台上上がった。

これが私のミニ自分史である。本当はこんなことを書く気はなかったが、ほんの参考までにと書いているうちにいろんなことを発見した。

一つは、人間は何か目に見えないものを背負って生きているんじゃないかということ。俗っぽく言えば、自分ではどうにもならない運というものがあること。その面から見れば、私など運を持たない人間かもしれない。

それでは全然運がないかといえば、あの大戦の中を何度も死地にさらされながらしぶとく生き延びたことを思えば、運がないと一言で言いきることもできない面がある。

「自分史」。変えようもない過去。自分の手でその過去を掘り起してみる。いい事か悪い事かわからないが、書いてみるのも勉強かもしれない。今のうちならまだ書けそうにあるが……。

